

### 「双子は鳥である」か？

小馬 徹

前回は、双子のパラドックスを解決する方法として、その一方または両方を死に至らしめる「強い論理」と自集団の外部へ移籍して排除する「弱い論理」とがあり、2つの論理は強度の差とも見なし得る事、また異性の双子の場合はパラドックスの強度が減る事を概観した。

2つの階層に分かれる社会では、双子の階層や境遇は親とは逆転する事になるが、双子にはこれ以外にもある種の逆転現象も見られる事が注目に値する。

#### 生まれ順と地位の逆転

連載第51回に見たように、両アメリカ大陸の神話では、母親の胎内の双子は、先に生まれる名誉を得ようと競い合っている者として描かれていた。日本の民俗でも、生まれてくる双子には必ず「勝ち負け」があると云った一胎内で双子が均等に育つのが稀な事は、医学的にも知られている。これらは、双子が身体的には2つでありながら親族構造に占める位置を1つしかもたない「双子のパラドックス」の具現化を予見した表現であると言える。

大概の伝統社会では、もちろん、性差ばかりでなく兄弟間の生まれ順の差異も決定的な社会的意味を帯びる。兄（姉）は弟（妹）に優越し、弟にある種の権利さえ行使する場合がある。特に、長男の権利は父親の権利と二重写しになっている事が珍しくない。一つ最近までの日本社会を思い起こせばいい。ところが、双子の間では、往々現実の出生順序がそのまま親族関係における長幼の地位に反映されず、逆転した関係になる現象が見られるのである。

日本では、現在は産科の慣行に従って、双子の先に生まれた方を兄（姉）とするのが通例だが、かつては弟（妹）として遇するのが民俗的

な慣行として一般的だった。旧約聖書でも、ヤコブとエサウの物語やタマルの子供たちの例から、同様の事情がうかがえる。

西アフリカでも同様の慣行が知られているが、ナイジェリア南部のイフェ人がその一例である [Forde, Daryll, *The Yoruba-Speaking Peoples of South-Western Nigeria*, 1951]。

#### 双子のホロホロチョウという名前

ところで、双子のパラドックスには、前回考察したものとはやや趣の異なる解決法がある。そこで、以下にそれを見てみたい。

連載第48回では、スーダンに住む西ナイル語系のヌエル人について触れ、双子にはホロホロチョウ、シャコ、鳥などの名前が付けられるという複数の報告を紹介した。また、エバンズ＝プリチャードは、「ヌエル人は双子は鳥だと言う」と書いていた [Evans-Pritchard, E. E., "Nuer Modes of Address", *The Uganda Journal*, 12(2), 1948]。彼は、多産性が双子と鳥の連想関係に関わり、双子が卵生のワニや亀を食べる事を禁じるタブーはそれが拡張された結果だと見ている。その一方では、双子はこれらの動物を尊敬しないし、また人間の双子と動物の双子は同一視されないとも慎重に述べている [Evans-Pritchard, E. E., *Nuer Religion*, 1956]。

ある時期、この事情をめぐる、幾人もの高名な人類学者たちが認識論的な論争を繰り広げたことがある—これについては、手際のよい紹介がある [青木保『文化の翻訳』、1978]。レヴィ＝ストロースは、ヌエル人の間では双子が「神の子」とされ、神々の領域である天空に因んで「上の人」と呼ばれている事、ならびに鳥の中でも飛行が不得意なホロホロチョウやシャ

コの名を与えられている事に注目し、二つの事実を結び付けて、次のように解釈した。ヌエル人は双子と鳥が外見的に似ていると思ってもらなければ、混同しているわけでもない。論理的な統合関係こそが問題にされているのだ。というのは、双子は他の人たち、つまり「下の人」に対しては「上の人」であり、また他の「上の鳥」、つまり良く飛ぶ鳥に対しては—ホロホロチョウやシャコがそうであるように—「下の鳥」である。そして、ちょうど鳥がそうであるように、双子は、天空の神や霊と地上の人間との仲介的な位置に属する存在となるのである [Lévi-Strauss, C., *Totemism*, 1969]。

ターナーは、我々が先回から問題にしている文脈において、このテーマを次のように考えた。ヌエル人は、構造的に1つである双子の人格を聖なる次元に結び付け、一方、経験的に2つである双子の肉体を俗なる次元に結び付けることで、双子のパラドックスを解決しようとしている。この両面はそれぞれ別個の文化的な次元（つまり、「宗教」と日常生活）に属しているのだが、双子の概念が生活のその2つの次元を仲介する。だから、ヌエルでは双子はある種の象徴的・儀礼的な価値を与えられているのであり、社会構造から切り離されてはいないのだ [Turner, V., *The Ritual Process*, 1969]。

### 交通信号と双子の象徴性

すると、双子のパラドックスには、いわば第三の解決法がある事になるだろう。

同様な発想は、ヌエルの他にも見られる。西アフリカのヨルバ人やファン人は双子を猿と呼ぶ。つまり、「双子は、多くの社会で、獣性と神性を仲立する働きをする」[ibid.]。

前節の文脈と関係づける時に一層興味深いのは、次の諸例である。ガーナ北部に住むグレンシ人は男同士の双子 (*liiba*) を「両手」(*nsusi siyi*) と言い、その初生児を「天空の神」(*Ayini* または *Awene*)、次生児を「大地」(*Atena*) と名付ける。また、近縁のタレンシ人は男同士

の双子 (*leeba*) の初生児には「天」(*Yin*)、次生児には「尻尾」(*Zuur*) という名前を与える [Manoukian, M., *Tribes of the Northern Territories of the Gold Coast*, 1951]。

また、ガーナから遠く隔たったスーダン北部に住んでいるナンカンセ人にもこれとよく似た慣行があり、双子の初生児を「天空の神」、次生児を「大地」と呼ぶ [Parrinder, G., *West African Religion*, 1949]。さらに、南部アフリカのトンガ人は、双子の母親を「天空」(*Tilo*)、双子を「天空の子供たち」(*bana ba Tilo*) と呼んでいる [Smith E. W., *The Secret of the African*, 1929]。

グレンシ人が双子を両手と呼ぶのは、双子の一对性の強調であり、ナンカンセの場合と同様に、一对として天空と大地を仲介する存在として特別の象徴的・儀礼的な価値を双子に与えているからだ。タレンシも同様に解釈できる。

今興味を引くのは、これらとヌエルの対比である。ヌエルの場合、双子は天空と大地の中間の属性をもつ点で、交通信号の3項対立における黄を思わせる。黄は光のスペクトラムで赤と緑のちょうど中間部に位置するからである。

これに対して、グレンシなどの場合は、一对としての双子が天空と大地の両方の属性をちょうど半分ずつ帯びている。これは、交通信号では、赤と緑の2灯が対立し、その中間的な移行状態がその（一方または両方の）点滅によって示される方式に相当しよう。赤と緑はまさに補色関係にあり、この場合点灯はその色自体、消灯は補色で、それを脳に交互に感じさせる。トンガの事例はグレンシ型の一変形で、双子たちと母親とが一对にされて、天空と大地の両方の属性を同時に表現しているといえる。

ヌエル型とグレンシ型では、3項対立と2項対立というアイディアは異なるが、どちらも双子の仲介的な属性を巧みに象徴し得ている。それは、普通の3灯式も点滅2灯式も交通信号として十分に役立っているのと同じである。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)